新しい住まい方「グループリビング」

12/10/2013

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

今回、高齢者の方が安心して住める住居「グループリビング」の見学会に参加しました。
グループリビングとは?・・・と思われる方のために、少し説明をさせていただきます。
言わば、住む方の「自分の意思を大切」にして、共同で生活を営む自宅という感じです。そこには、10 部屋(25～30 ㎡)があり、自分で料理を作ってもよいが、夕食はみんなで顔を合わせて食事をするというものです。ですから、個室の他に、共同利用の玄関やリビングや風呂場があり、夕食は賄付です。もちろん、外出は自由ですし、仕事に通っている方もいます。寂しくなったら、リビングに集まり話ができます。介護施設ではなく、あくまで自宅です。
グループリビングは全国に約 50 あるといわれています。

今回、訪問したところは「グループリビングえん」という、埼玉県新座市にある 10 人の共同住宅です。ここの大きな特徴は、30 年にわたって地域で高齢者や障害者の生活支援をしてきた「NPO 法人」が、地元で継続して過ごせる場所ということで作り運営しています。10 名中、8 名が地元の人で、残りの方も地元にお子さんが住んでいる方とのことです。

←リビング兼食堂　(ときにはホールにもなります)
ある人の部屋。コンパクトな中に生活感があります。↓後方にベット

当日は、代表理事の小島さんからいろんな話を聞かせていただきましたが、
開設の理由として、次のようなことを挙げられていました。

① 地域で暮らして続けるためには、介護保険事業だけではできないものがある
② 現在の日本の家屋は、狭くてバリアフリー環境になっていないので、その住環境を提供したい
③ 国の高齢者住宅の政策が二転三転しており、自分達の目指す「住処」を作りたい
④ 約 30 年前に、藤沢市の西條節子(COCO 湘南)さんとの出会いがあり、大変刺激を受けたこと
　(西條さんは日本のグループリビングの創始的存在)

この内容からもわかるように、NPO 法人が運営するも、住民も参加したいわば自治会的な部分が多く見られます。特に、住まい方では住民同士が「つかず離れず」の関係を保っており、風呂の順番も何となく決まっており、生活のルールの最低限のものしか決めていないようです。このような環

境の中、なぜか住民はすべて女性でした。なかには介護を受けている方もいましたが、自宅扱いですので、外部の介護サービスの人が部屋に入ってお手伝いしてもらっている人もいました。

この代表理事をしておられる小島さんは「肝っ玉かあさん」的な存在で、私が 2 年前に、大阪吹田市の友―友様を見学した際の代表の小林様と雰囲気は似ておりました。実は、このような取りまとめ役の存在が、このような人間の営みの場所には必要なのです。もうひとつ共通するのは、30 年にわたり、地域の福祉事業やボランティア活動をしてきたことです。そして、その中から生まれている支援者ともども「和=輪」を作っていることが大きな原動力になっていることです。

さて最近、高齢者向けにできている「サービス付高齢者住宅」や「有料老人ホーム」とどのように違うかですが、一言で言えば「住人が運営に参画している」点です。前者は一方的な管理のもとに生活することになりますが、後者は互助的な役割を住民と支援者でおこなっているということです。

ですから、自分達の生活や自分達の変化に合わせて運営していますので非常に生活感があります。今回の訪問で部屋を見せていただいた人は、台所の道具やテーブルの上のもの、またトイレなど生活感のあふれるものでした。

今後、このような温かみのある「家」ができることが望まれます。

昨年のグループリビングワークショップで聞いた話です。(基調講演の宮本みちこ教授(社会学者)談)

日本人は、家族の古い息苦しい関係から解放され、自由を謳歌したい。
しかし、孤独でいることは寂しい。暖かい人間関係で囲まれている「サザエさん」的な関係に根強い人気がある。

また、家族や会社からの解放を楽しみつつも、リスク回避のために自らを縛りつけてきた、家族集団、企業共同体に救いを求めている。

NPO 法人「暮らしネット・えん」 新座市石神 2-1-4

以上